

2 小中高12年間を見据えた取組の充実

(1) 12年間を見据えた授業改善

○ 小中高の授業改善の状況と今後の方向性

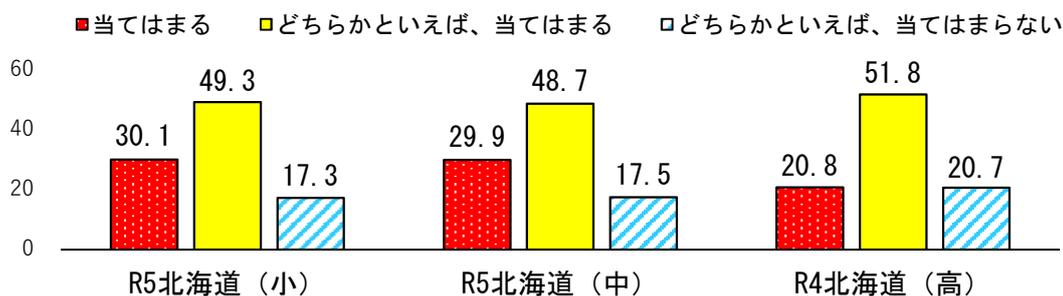
〔小中高の授業改善の状況〕

※R5北海道（小）、R5北海道（中）は、令和5年度（2023年度）全国学力・学習状況調査のデータを掲載しています。

※R4北海道（高）は、道教委が独自に実施している令和4年度（2022年度）北海道高等学校学習状況等調査のデータを掲載しています。

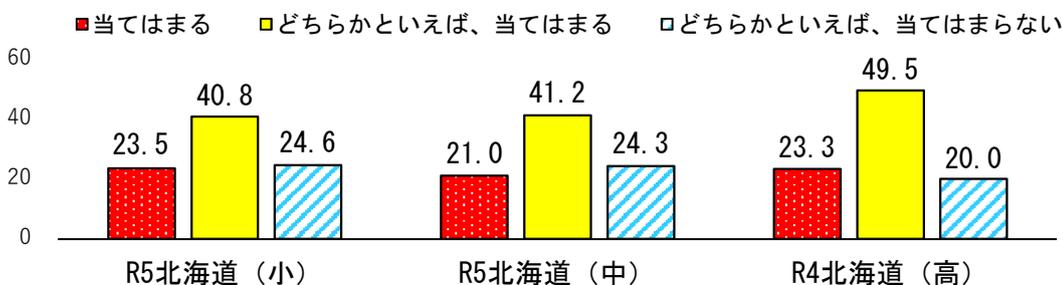
※令和4年度（2022年度）北海道高等学校学習状況等調査は、道立高等学校等の第1学年を対象とし、令和5年（2023年）2月から3月までの期間に、全国学力・学習状況調査質問紙調査と同様の質問項目などについて調査するものです。

□ 課題解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた。



・課題解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる児童生徒の割合は、小・中学校で約3割、高等学校で約2割となっています。

□ 自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していた。



・自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表している児童生徒の割合は、どの校種も約2割となっています。

〔今後の方向性〕

□ 上記の状況を踏まえ、授業改善の充実に向け、次の2点をポイントとして、授業改善を進めましょう。

- ・問題を発見・解決したり、考えを他者と伝え合ったりするなど、**知識及び技能を活用し、理解を深めていく学習過程**を設定すること。
- ・自分で考えたことや感じたことを**適切な表現で伝え合う場面**を設定すること。

※次のページ以降、教科ごとの授業改善について、有識者による分析と考察を掲載しています。

国語科の授業改善に向けて

○〔知識及び技能〕(2)情報の扱い方に関する事項についての理解

今年度の全国学力・学習状況調査の解答類型の分析から浮かび上がる共通の課題として、〔知識及び技能〕(2)情報の扱い方に関する事項を指摘することができます。指導に当たって、まずは我々教師がこの指導事項をしっかりと理解しておく必要があります。例えば、(小)第5学年及び第6学年のア「原因と結果など情報と情報との関係について理解すること」に係る設問が、今年度は小学校¹で出題されています。学校種を問わず、この調査問題と「小学校学習指導要領(平成29年度告示)解説(国語編)」に示された解説とを照らし合わせるなどして、当該指導事項への理解を深めることが大切です。また、「引用」に係る(小)第3学年及び第4学年のイや、(中)第1学年のイも重要です。これらの指導事項を、下記に示したような年間指導計画に意図的・計画的に組み込み、指導の連続性を意識しながら言語活動を展開しましょう。その際、国立教育政策研究所の報告書に示されている授業アイデア(右QRコード)も参考になります。



○年間指導計画の効果的な運用

育成を目指す資質・能力を確実に身に付けさせるために、年間指導計画を効果的に運用しましょう。年間指導計画が「すぐに活用できる環境」にあるかを確認した上で「各指導事項の定着の状況を把握し、指導を改善する」という視点を持ちたいです。右図のような同一の指導事項の指導の連続性を意識し、定着が不十分であれば、のちの単元(題材)での指導を工夫します。具体的には「努力を要する」状況(C)の児童生徒への指導の手立てを事前に構想することや、全体のバランスを考慮しながら指導時数を調整することなどが考えられます。また「おおむね満足できる」状況(B)や「十分満足できる」状況(A)の児童生徒に対する次の単元(題材)での指導を工夫し、更なる高みを目指させることも重要です。

(第1学年〔思考力、判断力、表現力等〕「A話すこと・聞くこと」の一部を抜粋)

No	1				2				3				4							
	単元名				1				2				3				4			
	指導事項・言語活動例																			
	指導時数																			
					4				5				4				5			
〔思考力、判断力、表現力等〕	(1)	ア	目的や場面に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を整理し、伝え合う内容を検討すること。																	
		イ	自分の考えや根拠が明確になるように、話の中心的部分と付加的な部分、事実と意見との関係などに注意して、話の構成を考慮すること。																	
		ウ	相手の反応を踏まえながら、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫すること。																	
		エ	必要に応じて記録したり質問したりしながら話の内容を捉え、共通点や相違点などを踏まえて、自分の考えをまとめること。																	
		オ	話題や展開を捉えながら話し合い、互いの発言を結び付けて考えをまとめること。																	
	(2)	ア	紹介や報告など伝えたいことを話したり、それらを聞いて質問したり意見などを述べたりする活動。																	
		イ	互いの考えを伝えるなどして、少人数で話し合う活動。(上記以外の言語活動)																	

「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」(中学校国語) P49

まとめ

○「C読むこと」の「構造と内容の把握」や「精査・解釈」に係る指導事項の更なる定着を目指しましょう！

文章を読んで、中心となる語や文を見付けたり要旨を把握したりすることについては、小・中学校ともに一部の設問で改善の傾向が見られます。今後とも、先生方の創意工夫のもと、児童生徒がわくわくする言語活動を展開し、「C読むこと」の指導を更に充実させましょう。

○「他の人に分かるように表現する」学習を重視しましょう！

自分が考えたことや感じたことを、他の人に話したり書いたりして伝える学習を重視し、あいまいな表現の仕方を見逃さず、育成を目指す資質・能力を踏まえて確実に指導しましょう。



算数・数学科の授業改善に向けて

岩手大学教育学部准教授 佐藤 寿仁 氏

(元国立教育政策研究所学力調査官・教育課程調査官)

調査結果から見られる特徴的な成果と課題

◇…成果 ◆…課題

- ◇ 図形の性質を理解し、それを事実的に使うことができること。
- ◆ 数量における関係に着目して、ある事柄が成り立つかどうか判断し、その理由を数学的に説明すること。

調査結果の分析内容

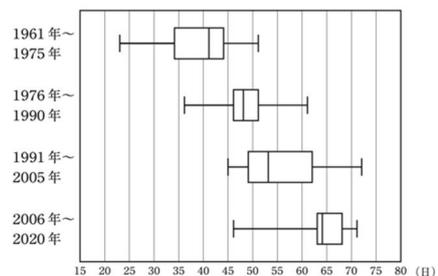
算数・数学では、数量や図形、それらの関係に着目して数学的に考え問題解決することが大切であり、その過程について説明できるようにすることが求められます。

○ 比例の関係を捉え、それを利用して問題解決すること

小 $\boxed{1}$ (3)は、伴って変わる二つの数量が比例の関係にあることを用いて、知りたい数量の大きさの求め方と答えを式や言葉を用いて記述できるかどうかをみる設問です。正答率は50.8%（全国55.5%）で課題があります。この設問では「いす4脚の重さは7kgである」ことをもとに、いす48脚の重さについて数学的に推論し、それを説明することができるかどうかという思考・判断・表現を評価しようとするものです。解決するためには、いす1脚当たりの重さといった単位量当たりの大きさを考えることができることや、いすは全て同じいすであり、いすの数を2倍にすれば、その重さも2倍になる関係であることから、いすの重さはいすの数に比例していることに着目することが大切です。誤答である「 7×48 」と記述した児童は15.3%（全国13.5%）であり、ある二変量に比例の関係を見だし、数学的に推論することができなかつたといえます。

○ データの分布の傾向を捉え、判断の理由を数学的に説明すること

中 $\boxed{7}$ (2)は、箱ひげ図の箱に着目し、その傾向を読み取り、説明することができるかどうかをみる設問です。正答率は31.5%（全国33.6%）、無解答率25.0%（全国22.8%）で課題があります。「1991年～2005年の箱の長さよりも2006年～2020年の箱の長さの方が短く、データが集まっているから」と記述した生徒は10.8%（全国10.2%）で、箱ひげ図の箱について、データの散らばりのみに着目して記述した生徒がいることが分かりました。本設問では、黄葉日がだんだんと遅くなっていることの根拠を説明するためには、2つの箱ひげ図の箱が横軸上で、それぞれどのような位置にあるかに着目し、説明する必要があります。さらに、本設問の無解答率が高いので、統計的に示されたグラフや図などを読み取ることも大切です。



「令和5年度中学校第3学年数学 $\boxed{7}$ (2)」の箱ひげ図

算数・数学科の授業改善に向けて

○ 知識の概念的な理解のために“数学的な見方・考え方”を重視すること

数学的な資質・能力を育成するためには、児童生徒が自分事の問題をもち、数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して問題解決する授業が求められます。特に、知識及び技能について、教師が一方向的に教え伝えるのではなく、概念的に理解させることが大切です。

小2(1)の示された複数の四角形が台形であると判断する問題で、台形と解答した児童は86.1%と高いです。しかし、理由を台形の定義で正しく選択したのは60.8%です。授業では、4つの四角形は同じ図形といってよいのかについて、図形の構成要素の関係に着目し、図に共通する1組の対辺が平行であることを見いだす活動を設定します。その上で、統合的に考え、台形とはどのような四角形であるのか理解させることが大切です。

(1) ゆいさんは、下のようにテープを直線で切って、①、②、③、④のような四角形をつくります。



①、②、③、④について、どのような四角形なのかを、次のようにまとめます。

①、②、③、④はどれも ① です。
なぜなら、② だからです。

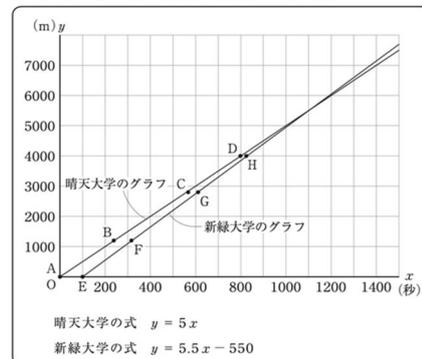
「令和5年度小学校第6学年算数2(1)」の台形の問題

○ 問題解決する際に、比較したり検討したりする場面を設定すること

算数・数学科の授業で問題解決する際に、児童生徒が話し合うなど対話を取り入れることが大切です。それは単にグループを編成して交流することにとどまるのではなく、式や図、グラフなどを用いて数学的に考えたことを伝え合い、教師はその数学的な内容について評価するのです。

中8(3)の直線のグラフや式を用いて問題解決する方法を説明することができたのは42.2%で、無解答率は15.2%でした。新緑大学が晴天大学に追いつくことを予想し、それがどの位置にあるのかについて、授業では話合いの場面を設定することが考えられます。その際、「グラフを用いる場合」と「式を用いる場合」の方法の説明の違いについて確認することが大切です。また、説明が数学的に正しいかどうかを自分たちで吟味し、よりよい表現となるよう検討することも大切です。これは、生徒の自己調整を促すこととなります。

コンピュータを使って表された直線のグラフと式



「令和5年度中学校第3学年数学8(3)」のグラフと式

まとめ

- どんな数学的な見方・考え方を働かせるとよいかについて検討し、授業で使用する教材や発問などを考え、授業を行いましょう！
- 算数・数学科の授業において、単に話し合わせるのではなく、数学的に表現することを促すことが大切です。その上で、数学的に表現する力を高めることができるような対話の場面を設定し、支援しましょう！
- 全国学力・学習状況調査の結果を形成的評価とし、その傾向を捉え、授業づくりに活かしましょう！

英語科の授業改善に向けて

釧路市教育委員会外国語教育アドバイザー 平木 裕氏
(元文部科学省初等中等教育局視学官)

調査結果から見られる特徴的な成果と課題

◇…成果 ◆…課題

- ◇ 情報を正確に聞き取ったり読み取ったりすること。
- ◆ 聞いたことや読んだことについて、自分の考えやその理由を話したり書いたりして適切に表現すること。

調査結果の分析内容

○ 社会的な話題に関して読んだことについて、考えとその理由を書くこと

本問⁸(2)「ブラウン先生の質問に対するあなたの考えと理由を英語で簡潔に書きなさい」では、正答率が17.2%（全国19.5%）となっており、無解答率33.1%（全国29.3%）と併せて考えると、社会的な話題に関する短い文章を読み、書き手の意見に対する自分の考えとその理由を書くことに課題があるといえます。無解答の状況については、そもそも自分の考えが浮かばなかったり、考えは浮かんだがそれを英語で表現できなかったりなどしたケースが考えられます。

一方、考えは書いているがその理由を書いていないものが28.1%（全国28.0%）であったことや、文章の要点を問う⁸(1)は正答率が53.7%（全国56.1%）であったことが注目され、書き手の意見が理解できた生徒の割合は、上記の正答率ほど低いわけではなさそうです。関連して、

⁴の短い説明を聞いてその要点を捉える問題も正答率が56.2%（全国54.8%）であり、「読むこと」の場合とほぼ同様の傾向です。さらに「話すこと」の調査²において、聞いたことについて自分の考えとその理由を話すことの正答率は4.2%（全国）、話す内容は思い浮かんだが、それを表現する英語が浮かばなかったものが41.1%（全国）であったことも参考になります。

こうしたことから、社会的な話題に関して聞いたり読んだりする際、話し手や書き手の意見といった要点を捉えることはある程度できているものの、それに対して自分自身の考えを理由とともに表現する（本問⁸では「書く」）ことが十分にはできていない、ということが分かります。

本道の生徒に求められる資質・能力は、単に聞いたり読んだりしてその内容を理解することにとどめず、そこに表れている意見に対して自分はどうか考えるのか、それはなぜなのか、といったことを話したり書いたりして適切に発信できることでしょう。

⁸ 英語の授業で、ブラウン先生が作成した文章が学習者用端末に送信されました。これを読んで、以下の問いに答えなさい。

The image shows a tablet screen with an English text passage and a question. The text describes various uses of robots in daily life, such as in restaurants and as pets. The question asks the student to agree or disagree with the author's statement that robots can improve lives and to explain why.

Today we see many kinds of robots around us. They are helpful. When I went shopping, I saw a robot and it was working as a guide. I could talk to the robot in English or other languages. At some restaurants, robots bring our meals. They can carry many plates at one time. Thanks to them, the restaurant doesn't need a lot of staff members. We have robot pets, too. We can have them even if we are busy with work or we live in small apartments. People will have fun if they live with robot pets. As I explained, robots can change many people's lives for the better. Do you agree with me? Why or why not?

「令和5年度中学校第3学年英語⁸」

英語科の授業改善に向けて

○ 学習指導要領の領域別目標を基に、「付けたい力」を貫く単元構想を！

学習指導要領は、領域別に「～することができるようにする」の形で目標を3点ずつ示しており、各校では、これを1年ごとの目標にブレイクダウンしてCAN-DO形式による学習到達目標を設定しています。こういった大きなレベルでの目標が、どの単元でも一点突破の「付けたい力」としてひも付けされているのでしょうか。本道においては、CAN-DOを日常の学習指導や評価に関連付けて活用することが不十分という課題が以前整理されましたが、単元でできるようになることを領域別目標や学習到達目標と明確にリンクさせることが解決への第一歩であり、単元構想の大前提でもあります。

○ 教科書本文等は、CAN-DOや単元の目標に応じた活用を！

教科書には、様々なコンテンツが盛り込まれていますが、例えば「本文」の部分は、単なる内容理解の対象として扱われる傾向があり、言語活動の一環で、言い換えれば英語によるコミュニケーションのために活用される場面は、あまり多くないのが実態です。

仮に、単元目標が「書くこと」の目標ウ「社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて書くことができるようにする」に関連しているとすれば、本文は意味を取って終わり、とはならないはず。そこは、話者・筆者が事実や意見などを発信している場であるという認識のもと、自分はそれに対してどう考えるのか、どう感じるのか、といった「自分ごと」を表現するような言語活動、つまり、領域間の統合的な言語活動がメインに展開される単元となっている必要があります。

そういう意味でも、単元の目標を一つのCAN-DOに絡ませることがポイントであり、どのCAN-DOに焦点化するかで教科書コンテンツの料理法も異なってくるわけです。さて本文をどう「利用」しようか、というような意識で授業づくりを考えることが大切です。

「授業は英語で行うことを基本とする」ためにも、教師と生徒や生徒同士のやり取りを大切にするスタンスをベースに、「あなたはどうか考えるか。なぜ？」に拙い英語でもよいから、その場で対応する経験を積ませたいものです。そうやって口頭で伝えたことを今度は書かせてみるのも、あとでフィードバックして正確さを高める上で効果的でしょうし、今回課題となっている理由の述べ方については、その多様な例に触れたり実際に使って伝え合ってみたりすることにより、相手が納得する理由とはどのようなものなのかを実感することもできるでしょう。



釧路市等における研修資料より

まとめ

○ 単元末に期待する生徒の姿に一步一步近づく指導と評価の計画にしましょう！

単元CAN-DOが軸となり、ブレることなく本時と本時がつながる流れで、各時は単元終末に至るワンステップ。教師も生徒も安心してゴールに向かうことができます。

○ 教科書本文等を言語活動のための心強い素材にしましょう！

教科書コンテンツは一つ一つなぞる対象ではなく、単元目標に迫る言語活動や「英語で行うことを基本とする」授業を展開するための手近なツール。学習者用デジタル教科書の効果的な活用も図りながら、上手に、都合よく利用しましょう。